

ヴィヴァン・ドノン『ボナパルト将軍麾下の 上下エジプト紀行』の200年

杉本淑彦

はじめに

いまから約200年前のこと、ヴィヴァン・ドノンというフランス人がいた。ナポレオン体制期の1802年11月にルーヴル博物館の初代館長に就任し、1815年にナポレオンが失脚するまでその地位にあった人物である。美術研究者にして画家でもあるが、じつは、いずれの分野でも二流でしかなかった。しかし、美術品に関して当代屈指の鑑識眼の持ち主で、ナポレオン軍とともにヨーロッパ各地をまわり、教会や王侯貴族の所有だった美術作品のなかから良品を戦利品として持ちかえって、ルーヴルのコレクションを豊かにした。

しかしルーヴルの館長に登用されたのは、鑑識眼を買われただけではなさそうだ。館長職拝命の8カ月前に、ドノンは『ボナパルト将軍麾下の上下エジプト紀行』（以下、『エジプト紀行』と略す）を刊行し、それがフランス読書界の話題の本となったことも、館長抜擢に与ったのだろう。ボナパルトを総司令官にしておこなわれたエジプト遠征の紀行文である。ドノンは、戦闘と風俗、遺跡を画帳に記録する役目を負って遠征に参加したのだった。

1798年から1801年までのあいだ、フランス軍は、およそ3万7000の将兵でもって異境地エジプトを占領していた。占領直前のエジプトは、名目上はオスマン帝国内の属国であるものの、イスタンブールからの威令は届かず、カフカス地方出身者を中心とする、マムルークと呼ばれる軍人集団によって実質的には支配されていた。エジプトは24の州に分けられ、各州ごとに、平均約500名のマムルークを擁する州長官（ベイ）が事実上の領主として君臨していたのである。ベイたちは、オスマン帝国各地の奴隷市場で、頑健な子供たちを買いとり、それに軍事訓練を施しマムルーク〔アラビア語で「買われた男」の意〕とした。そしてこのマムルークのなかから次代のベイが台頭するという仕組みが、16世紀初め以来くり返されていた。

占領の全期間を通じて、フランス軍はマムルークよりも優位に立つことになる。しかし、彼らの抵抗を完全に抑えこむことはできなかった。フランス軍は1798年7月21日に、いわゆる「ピ

ラミッドの会戦」なる戦闘でマムルーク騎馬軍団を撃破し、カイロを占領する。だがそれ以降も、とりわけカイロ以南の上エジプト地方において、マムルークの抵抗が終息することはなかった。

フランスによる占領は、当然のことに、マムルークからだけでなく、エジプト人一般住民からの抵抗をも引きおこした。18世紀末当時の住民総人口は、およそ450万。内訳は、まず、官吏と富裕不動産所有者としてトルコ人が約20万。キリスト教徒で、古代エジプト人の末裔と見なされているコプト人が、都市部を中心に同じく約20万。港湾都市部にギリシア正教徒が数千人。コプト人とギリシア正教徒は、おもに商業に従事し、経済的には中上層の暮らしをおくっていた。さらに、荒地でもおもに放牧で暮らしている、ベドウィンとよばれる非定住アラブ人が12万ほどいた。残りが、つまり住民の大多数が、定住アラブ人で、これが、経済的には中下層民をなしていた。カイロの総人口は約26万。第二の都市であるアレクサンドリアの人口は約1万。ようするに、当時のエジプトは、圧倒的にアラブ人農村社会だったわけである。

フランス軍の大部分は都市部に駐屯し、まずここで日常的に都市住民と摩擦を引きおこした。少数派の富裕トルコ人や、非ムスリムのコプト人とギリシア正教徒は対仏協力を転じたが、都市民多数派を構成する中下層のムスリムであるアラブ人が、抵抗の砂塵の、その砂一粒一粒だった。農村部もしかり。フランス軍は、行軍の先々で、そして巡回の先々で、アラブ人農民の抵抗に遭遇した。アラブ人にとって抵抗の最大の種は、風俗習慣の違いということではなく、なんといっても、膨大な占領経費が住民への課税と徴発でまかなわれたことにある。経済的負担は、いつの時代でも、どの国であっても、ピラミッド型社会の下にいけばいくほど重く感じられるものなのだ。そして抵抗には武力抑圧で応えられた。占領—抵抗—抑圧という、異境の地への侵攻がたいてい直面する陰鬱な回路を、このエジプト遠征はたどることになる。

フランス軍は約3年のあいだ、イギリス＝オスマン連合軍に敗れて降伏するまで、ナイル河の中・下流域を支配しつづけた。ただしナポレオン自身は、約300名の将兵をともなって1799年8月にエジプトを海路脱出してフランスに戻り、同年11月、「ブリュメール18日のクーデタ」によって政権を手中におさめる。

一方、遠征時のドノン⁽¹⁾は、ドセー(Louis Desaix)を司令官とする上エジプト方面軍に同行してナイル河を遡航、兩岸に点在する古代遺跡を画帳に書きとめた。そしてボナパルトとともに帰国。それから3年後に、図版入り旅行記『エジプト紀行』を世に問うたのである。

1 オリエンタリズムとしての『エジプト紀行』

この旅行記のなかには、軍事英雄としてのボナパルト像がちりばめられている。時の絶対権力者ボナパルトの歓心を買おうとする下心があからさまだった。ボナパルトにささげられた献詞からしてそうなのだ——「エジプトの壮麗なモニュメントに貴下の輝かしき名を副えること

(1) エジプト遠征の経緯についての最良の研究書として、Henry LAURENS, *L'expédition d'Egypte 1798-1801*, Armand Colin, 1989がある。

は、神話時代の紀伝のなかに今世紀の絢爛たる偉業を書き加えることに他なりません⁽²⁾。ドノンはエジプト遠征を神話化しようとしたわけだ。なかでも、ピラミッドの会戦におけるボナパルトが、神話中の英雄、いかえれば叙事文学中の英雄のように表された。会戦の火蓋が切っておとされる直前のこと、「ボナパルト将軍は、最後の指示を与えると、ピラミッドを指差しながら言った。『行け、これらのモニュメントの高みから40の世紀がわれわれを見つめていることに思いをいたせ』」という具合だ。開戦前にこのような名訓示がフランス軍将兵になされたとしたうえで、ドノンは会戦自体をこんなふうを描きもした。

オリエン特随一の、いや、おそらくは世界一の騎馬軍団だった。そのような軍団が、兵員わずかな小部隊に襲いかかってきたのだ。しかし、ハリネズミのように構えた銃剣が強襲を粉碎した。わが軍の一斉射撃を浴びて衣服が燃えだし火炎に包まれる者もいれば、致命傷を負いながらも突進したあげくにわが軍の戦列の目前で息絶える者もいた。大混乱に陥り野営地へ退却せんとする敵。しかし、わが軍の兵士が追撃に打って出た。敵味方入り乱れての戦い。その乱戦の末に、わが軍は敵方の野砲を奪い、さらに全師団でもって、敵方が野営する村の包囲網を狭めていった。……（中略）事ここにいたり、戦いの相貌は、双方が死力を尽くす激戦から、赤子の手をねじるような殲滅戦へと変わっていった。つぎからつぎへと突撃してくる者ども。だがそれは、わざわざ射殺されるために姿を現すようなものだった。一方で、わが軍の銃砲が放つ火から逃れようと、ナイル河に飛び込む者たちもいた。だがそれは、水によって命を奪われるだけのことだった。……（中略）かくして、僅かな数のフランス人が、英雄の指揮の下で世界の一部を征服し、大国の支配者を交替せしめた。マムルークの高慢な鼻を、わがフランスの歩兵隊の銃剣がついにへし折ったのである。⁽³⁾

叙述のなかでもっとも精彩を放っているのは、なんとといってもボナパルト訓示だろう。実際にもこのような訓示があったらいい。シャルル・アントワヌ・モラン中佐が会戦当日、従軍ノートの中に訓示を書きとめており、それによると、「兵士諸君、諸君らの義務を果たせ。これらのモニュメントの高みから100の世代がわれわれを見つめていることに思いをいたせ⁽⁴⁾」という内容だったらしい。

しかし、ドノン作「ピラミッドの会戦」物語には三つの虚構がある。一つは、フランス軍側の方がマムルーク軍側よりも兵員数で劣っていたとされたこと。事実は逆である。遠征軍の参謀長ベルチエ（Alexandre Berthier）が国防相に宛てた報告書によれば、参戦したマムルークの数は最大でも6000名を超えなかったらしい。その数に従卒（各マムルークに2名）をくわえると、

(2) Vivant DENON, *Voyage dans la basse et la haute Egypte pendant les campagnes du Général Bonaparte*, Pygmalion, 1990, p.31.

(3) *Ibid.*, pp.67-68.

(4) Charles Antoine MORAND, *Lettres sur l'expédition d'Égypte*, La Vouivre, 1998, p.64.

ピラミッドの会戦でフランス軍が直接対峙した敵勢力は、約1万8000名だったと考えられる。対するフランス側の兵員数は約2万5000名だった⁽⁵⁾。

虚構の二つめは、マムルーク軍が殲滅されたような書きぶりであることだ。マムルーク軍本隊は上エジプト方面への撤退に成功したのであり、実際にはフランス軍側の大勝利といえるほどのものではなかった。第三は、ドノン自身がボナパルトの訓示を現場で聞いたかのような叙述がなされていること。実際には会戦時、ドノンはアレクサンドリアにいた。このことをドノンは隠して会戦を叙述しているのである。

『エジプト紀行』には、主役ボナパルトにくわえて、準主役級の人物が一人登場する。ドセー一将軍である。準主役が添えられることで、物語に重層性が与えられ、叙事文学としての質がますます高まるというものだ。まずは軍事英雄としてのドセーが描かれる。舞台は1798年10月7日の「セディマムの戦い」。上エジプトにおいておこなわれた、マムルーク本隊との正面对決の戦闘である。ドノンは、ドセー軍が兵数において劣り地の利もマムルーク軍側にあったことを強調し、ドセー軍が序盤苦戦を強いられた様子をまず語る。そのうえで、堅忍不拔の意志でもってドセー軍が逆転勝利をおさめるさまを、こんなふうに描いた。

勝利するか、それとも玉砕するか、わが軍はぎりぎりの選択を迫られた。この極限状態ゆえに気持ちが一つにまとまり、勇者の名を挙げるなら全員の名を挙げねばならないほどに、わが軍は一個の人体と化した。熱血の闘将ラトゥルネリ指揮下の軽砲兵隊が、驚くべき機略を発揮しマムルークの野砲を使用不能状態へと迅速に追い込み、そこへさらに擲弾兵も急襲をかけた。敵は大砲を捨てて逃走し、不意を衝かれ動揺した騎兵軍団も遠方へと退却し雲散霧消した。かくして、わが軍に10倍する大軍勢が跡形もなく消滅し、戦場にはわが軍だけが姿をとどめていた⁽⁶⁾。

この「セディマムの戦い」物語にも虚構がある。目撃談風に語られているが、またしてもドノンは戦場にいなかったのだ。このときドノンはまだカイロにいた。ドノンが上エジプトへ向けてカイロを発つのは、セディマムの戦いからおよそ1ヵ月後のことである。

ピラミッドの会戦もセディマムの戦いも、ドノンは目撃せずに描いた。目にしたものを語ったのではなく、語りたかったものを語ったのである。語りたかったもの、それは、物量に優るオリエントの軍勢と、意志と智で優るフランス軍とが激突し、勝敗の行方定まらぬほどの接戦を経て、結局はフランス軍が勝利をもぎ取った、というストーリーである。

もちろん、武勲だけでは一級の叙事文学にならない。ドノンの『エジプト紀行』は、さまざま

(5) 双方の兵数については、cf. Clément de LA JONQUIÈRE, *L'expédition d'Égypte 1798-1801*, t.2, Charles-Lavauzelle, 1899, p.180. 全5巻からなるこの本は、陸軍参謀部付戦史編纂所によって発行され、フランス軍文書集という性格を持っている。

(6) DENON, *op.cit.*, p.131.

まな逸話を織りこみ、読み手を飽きさせない。たとえば、アレクサンドリアからカイロへの進軍中にフランス軍が遭遇した一事件がある。これは、『エジプト紀行』によって初めて本土フランス人に伝えられたもので、こんな内容だった。

アレクサンドリアを発って2日目、砂漠の中で数名の兵士が、顔面から血を流している若い女性に遭遇した。幼児を一人つれていた。片手でその子の手を引き、もう片方の手は虚空を彷徨っていた。物にぶつからないように、あるいは道標になるものを探そうとしているのだ。兵士たちは好奇心に駆られ、通訳も兼ねていた道案内人を呼び寄せ、女に近づいていった。女の発する哀訴の言葉が聞こえてきた。涙を生じさせるあの器官が、なんとえぐり取られていた。砂漠の中で若い女と子供だけとは、いったいどうしたことなのか。兵士たちは驚き事情を尋ねた。目の前のこの恐ろしい情景は、嫉妬のあまりの狂気がなせる業だったのだ。女は恨み言を何ら口にせず、ただ一つ、同じ不幸に突き落とされている無垢な命を飢えから救ってくれるよう、身も世もなく頼むのだった。兵士たちは憐憫の情に駆られ、自分たちの方こそよほど逼迫していることも忘れ、配給食糧の一部をすぐに分け与えてやった。自分たちは我慢してまで、底を尽きかけている貴重な水を与えてやりもした。ところがその時だ、憤怒の形相で男が一人現れた。遠くから女の行方を目で追いながら復讐劇を堪能していたこの男は、急いで駆けつけ、女の手からパンと水とを取り上げたのだった。兵士たちが情けをかけ恵んでやったものが、不幸なこの母子にとって命の最後の拠り所だったというのに。「止めろ」と男は怒鳴った。「こいつは、女の操というもの知らないヤツなのだ。俺の名誉を穢したのだ。このガキのせいで俺の面子はまるつぶれだ。不義の子なんだよ」。わが軍の兵士たちは、邪魔だてする男を遮り、女に救いの手を差し伸べようとした。女へのこの同情が、怒り狂うこの男の嫉妬心をますます煽ってしまった。男は短剣を抜き、女を刺し殺してしまったのだ。子供も、ムズッと掴み上げ、地面に叩きつけ殺してしまった。それから、愚かしいほど凶暴なこの男は、周りの人間を、身動き一つせず睨みつけるのだった。報復など怖れはしないぞ、という様子だった。⁽⁷⁾

この事件は実話なのだろうか。ドノンには、この事件がおきたとされる1798年7月には、まだアレクサンドリアにとどまっていた。目撃してはいないのだ。そのうえ、フランス軍の公式文書には事件の記録がない。ただし、従軍日記や回想録のたぐいのなかで事件に言及しているものが、一件だけだがある。サヴァリの『ロヴィゴ公爵の回想録』⁽⁸⁾である。サヴァリはドセー將軍の副官として遠征にくなり、回想録のタイトルどおりナポレオン体制期に公爵にまで上りつめる軍人である。この回想録は復古王政期に執筆され、1828年に出版された。

だが、証言があるからといって、実際にあった事件だとは断定できない。ナポレオン体制に

(7) *Ibid.*, pp.65-66.

(8) cf., Anne-Jean-Marie-René SAVARY, *Mémoires du duc de Rovigo*, t.1, Bossange, 1828, p.67.

ついでに現代の中堅研究者であるチエリ・レンツによれば、この回想録は「おそらく潤色されているうえに、真偽の確かめられないエキゾチックな逸話を交えて話を面白くしている」という。とくにこの事件をサヴァリが目撃した可能性はきわめて低いようだ。サヴァリは従軍日記をつけていたのだが、それと回想録を対照させたレンツによると、日記にはこの事件が言及されていないのだ。「この逸話が言及されたのは、おそらく、『回想録』を売らんがための工夫だった」というのがレンツの見立てである⁽⁹⁾。

強引に逸話を捏造してまでドノンが語りたかったことはなにか。ドノン自身がそれに答えている——「オリエント人の家庭内がどれほど専制主義的なものなのかを知りたいければ、どうぞこの逸話を読んでいただきたい。ただし、予断に基づく嫉妬心や、いかなる振る舞いに及ぼうと宗教の名において赦される嫉妬心の、その残忍さを目にしても動じない自信がおりならのはなしですが⁽¹⁰⁾」。ようするに、イスラームによって専制主義が助長されている「野蛮なオリエント」と、不幸な人びとを救うためなら自己犠牲もいとわない「ヒューマンなフランス」という優劣の二項対立を、ドノンは読者に語りたかったのである。

この二項対立は、別の逸話を通じても語られた。1798年12月17日に上エジプトのモンカチン村近くでおきた窃盗事件で、これも、『エジプト紀行』によって初めて本土フランス人に伝えられたものである。ドセー將軍とアラブ人の少年一人にまつわる、こんなお話だった。

私たちが休息をとっていると、ドセー將軍のもとに罪人が一人引っ立てられてきた。「泥棒です。われわれの鉄砲を盗もうとしていた、その現場を押さえました」という大声の後ろから現れたのは、年の頃12歳、天使のように可愛らしい少年だった。軍刀で斬られたのだろう、肩に大きな傷があったが、傷を見つめる少年の顔には何の感情も読み取れなかった。その子は、飾り気のない泰然自若とした表情を將軍に向けた。その様子がなかなかのもので、周りの者たちはみな怒りを解いた。訊問が始まった。「誰に命じられて鉄砲を盗もうとしたのか」——「誰にも」。「なぜ盗もうとしたのか」——「神のみが知りのことだ」。「親はいるのか」——「貧しく目の不自由な母親が一人」。將軍はその子に諭そうとした。誰に命じられたのか、それを白状すれば危害を加えないが、黙っているなら、それ相応の罰が与えられることになるぞ、と。「誰にも命じられたわけではないと、さっき言ったはずだ。神のみに導かれたのだ」と少年は返答し、頭巾を脱いで將軍の足下に置きながら「さあ、この首を斬り落とせ」と大声で叫んだ。まったくもって有害な宗教だ。間違った原理がドグマとなってしまうことで、信者は両極端に走ってしまう。英雄的な行為にもでられるし、悪辣な行為にもでられるのだ。「哀れな子だ。もういい、追っ払え」と將軍は裁きを下した⁽¹¹⁾。

(9) Thierry LENTZ, *Savary: Le séide de Napoléon*, Fayard, 2001, pp.48, 53.

(10) DENON, *op.cit.*, p.65.

(11) *Ibid.*, p.139.

ドセーの寛容さを言祝ぐこの逸話は、じつは肝心な結末部分が捏造されている。上エジプト遠征軍中でドセーに次ぐ地位にあったベリアール（Augustin Belliard）がこの事件を目撃しており、その顛末を日記に書きとめていた。それによると、「犯人が若年なことで、すすんで罪に服そうとしている態度を考慮し、ドセー將軍は鞭打ち刑ですますことにした。少年はみずからその場に座り、背中に30回の鞭を受けた」というのだ。この日記を1890年代に発見したラ・ジョンキエールは、「ドノンよりはベリアールの記述のほうが真実なのだろう」と見立てている。⁽¹²⁾ たしかにドセーは、少年への罰を一等減じる程度の寛容さは持ちあわせていたのだろう。即決処刑を免じたのだから。しかし、12歳の少年を鞭打たせたのだ。それも30回。ドノンはドセーの寛容さを強調するために、事実を歪曲し、罰を与えず放免したという結末に書きかえたのである。

改竄したこの逸話を通じてドノンが語りたかったことはなにか。ドノン自身がこれを直接説明している。「それぞれの国民の道德心のありようを教えてくれるものこそ逸話である。それぞれの宗教、それぞれの法が民族にどのような影響を刻印するものなのか。それをつまびらかに説明しうるものは、論説ではなく逸話である」⁽¹³⁾ というのだ。ようするに、一方で、イスラームによってムスリムが落ちこんでしまった宿命主義と狂信、他方で、ドセーに代表されるフランス人の寛容さ、という二項対立の道德心を、ドノンは読者に提示したかったのだ。しかも、論説ではなく逸話という、叙事文学の語り口によってである。

『エジプト紀行』の代表的逸話といえば、両眼をえぐり取られた女性と、「天使のように可愛い少年」についての、綺談まがいのこの二つである。だが『エジプト紀行』には、ほかにも小さな逸話がたくさん織りこまれている。そしてその多くが、二つの代表的逸話とおなじように、フランス人と現地人とのあいだに境界線を引くものである。

たとえば、寛容なフランスと、その寛容さを悪用し裏切りつづけるアラブ人、という種類の二項対立を語る逸話がある。1798年10月に勃発したカイロ住民による反仏暴動の事後処理についての逸話である。ドノンは、寛容なフランス人と、悔い改めないアラブ人とのあいだに、やはり明瞭な境界線を引いた——「反徒たちには、ボナパルト將軍の大いなる仁慈に応じて深く悔悛する、ということがなかった。悲嘆にくれた顔つきをしていたが、その表情の裏には復讐心が隠されていた。彼らが赦された早くも翌日に、私は彼らの態度と顔つきのなかに不満の表れを見て取ったのである。……（中略）狂信性というものは、どれほどの恐怖政治を布いても根絶できないものなのだろう。ボナパルト將軍は、このような状況にあっても善意の姿勢を保たれた。恐怖を与えることよりも、仁慈を授けることを望まれたのだ。わが方の損害は甚大だったが、こうして事件は水に流された」⁽¹⁴⁾。

(12) LA JONQUIÈRE, *op.cit.*, t.3, pp.506-07.

(13) DENON, *op.cit.*, p.139.

(14) *Ibid.*, pp.116-17.

表情の裏に復讐心を読みとったというのは、まったくの主観にすぎない。客観的事実はただ一つ。事件が「水に流され」たりなどしなかったことだ。東部デルタ地帯で治安維持の任にあった師団長レイニエ（Jean Reynier）にボナパルトが書き送った手紙（10月27日付）によれば、「カイロでは毎晩、30個ほどの首を斬り落とさせている。もちろんそれ以外に指導者連中の首もたくさんだ。連中には、これがよい見せしめになると思う⁽¹⁵⁾」というのだ。

主観にすぎないという点では、第25番函版「カシム＝ベイ館の庭」の説明文もそうだ。マムルークの頭領の一人だったカシムの館は接收され、遠征に同行した学者・芸術家による学術団体「エジプト学院」の本部がここに置かれた。ドノン自身が学院メンバーでもある。ドノンは説明文のなかで、庭にある東屋の使われ方が接收以前と以後とでまったく様変わりしたと力説した。かつて「そのトルコ風東屋は、コーヒーを飲みタバコを吸い、無意味な話題を何度も持ち出したり、私的利害に係わることをあれこれ計算したり、ひそひそと謀を廻らしたり、謀反計画を詮索したりその対抗策を練ったりする場所」であった。しかし、「学院メンバーの寄合所となってからは、なんと大きく変わったことだろうか。生气あふれる場所、活気ある議論が交わされる場所、そして率直な意見交換がなされる場所となった」というのだ。

東屋のなかでコーヒーが飲まれ、タバコが吸われていたことは確かだろう。しかし、そのほかの事柄は、接收後のことをふくめて、すべて主観に基づく断定にすぎない。このような根拠のない断定によってドノンは、こっそりと陰謀にふけるマムルークと、明るく自由闊達に議論するフランス人という、対照的な世界を描きだしたのである。

陰謀を思いめぐらすほかは無為徒食、というこの世界。ドノンによれば、じつはこの世界はマムルークにかぎらず、エジプト社会に広範に見うけられる世界だった。第94番函版「エジプトの家庭用品」の説明文は、「余計な飾りの多い」日常用品を取りあげ、その世界をつぎのように描いている。

体を動かさずに悦楽を求め、興奮に静かに身を委ねるだけで何か喋るということさえしない民族にとっては、装飾のたくさんあるほうが確かに都合がよい。……（中略）体を動かすのは奴隷たちなのだ。客を歓待する場合でも、手が一振りされるだけ。用件がある客人にも、儀礼でやって来た客人にも、手の一振りであらゆるものが出てくる。砂糖漬けの果物にシャーベット、コーヒー、水キセル、薔薇水、香水。こういった品物に囲まれて、ひねもす時を過ごす。……（中略）うわべは優雅に見えるこういった懶惰な生活こそ、オリエント人を骨抜きにしているあらゆる悪徳の、その根源にあるものだ。こうした生活を愛しく思い、それを手に入れようとするものだから、オリエント人は強欲で、利己的で、吝嗇で、残忍で、横暴で、そして残虐にもなるうというものだ。

(15) *Correspondance de Napoléon 1er*, t.5, Plon, 1860, p.96.

動きまわらずに済ます生活習慣を、物臭だとか無精だとか、そんなふう決めつけることはできる。しかし、このおなじ習慣を、重らかだとか沈着だとか、そんなふう評することだってできる。どのように評価すべきなのか、そのことに絶対的な基準などない。ドノンが持ちだした基準は、可能なものの一つにすぎない。

さまざまある基準から一つだけ取りだしそれを絶対視するこの視座から、ドノンはなかなか免れなかった。雷の原因をめぐってドセイ将軍とムスリム法学者とのあいだで交わされた（とされる）議論を紹介する逸話も、このような視座に絡みとられている。フランス人が科学上の知識を身につけている一方で、アラブ人は幼児のように無知だ、という逸話である。1799年1月、上エジプトでのこと、法学者はつぎのように語ったという。

これは天使なのです。しかし、たいへん小さな天使なので、空中にあるのですが誰の目にも見えません。小さくても力持ちです。地中海の雲をエチオピアにまで運んでくるのですから。人間たちの悪心が度を超すと、天使はその声を人間たちの耳に響かせます。非難と警告の声です。意のままに罰する力があることを示すために、天使は天空の扉を少し開け、そこから雷光を投げつけることもあります。

そしてドノンは、この逸話をこんなふうに締めくくる——「立派な顎髭をたくわえている、分別あるはずの人間から、こんな子供じみた作り話を聞かされると、もう驚き呆れるしかあるまい。この現象についてドセイ将軍が別の説明をしてやった。ところが法学者は、将軍の説明をまったく愚かなものとみなして、聞く耳を持たなかった⁽¹⁶⁾」。

科学的かどうかという基準で判断すれば、ドノンに代表されるフランス側と、法学者に代表されるムスリムとのあいだの優劣の差は歴然だろう。しかし、詩的想像力という基準で判断すれば、優劣の差は逆転する。この基準からすると、ドセイは興味に欠ける散文の人間にすぎない。

アラブ人はあらゆる点でフランス人よりも劣っている、とドノンが見なしていたわけではない。ドノンは、兵士としての能力にアラブ人は長けていると考えていた。それは「われわれに恐怖を感じさせるほど」のもので、「歩かせれば走っているのかと思うほど、馬に乗らせればケンタウロス〔ギリシア神話で半人半馬の怪物〕かと思まがうほど、泳がせればトリトン〔ギリシア神話で半人半魚の海神〕のようだ」という。だがこの優れた能力は兵士としてのものであって、上に立つべき指揮官としての能力ではけっしてなかった。指揮官として秀でているのは「われわれ」フランス人だと、ドノンは頑としてゆずらない。「このような優れた特性を有する数百万人の集団を、この国の200ヵ所所て毅然として指揮しているのが、一人一人自立している4000名のフランス人であった。服従する習わしと、⁽¹⁷⁾指揮する習わしは、それぞれ別個の生き方である」というのだ。

(16) DENON, *op.cit.*, p.160.

(17) *Ibid.*, p.161.

自他の二項対立を力説する逸話として、古代遺跡に対するフランス人と現地人の対応の差異を語るものもある。まず、古代ローマ時代以前の遺跡のかずかずを目にしたときの感動を、ドノン⁽¹⁸⁾は熱っぽく語る。たとえば1799年1月26日、ルクソール〔旧名テーベ〕の遺跡群を初めて見たときのようすはこんなふう⁽¹⁸⁾に語られた。

散在する遺跡を前にして部隊は合図もないのに行軍を停止した。そして、自然な感情のおもむくところ、皆が一斉に手を鳴らした。この古都の名残を占領することが、部隊の栄えある仕事の目的でありこれでエジプト征服がすべて成されたかのような感動にとらわれたのだった。テーベの町が目の前から忽然と消えてなくなるのではないかという思いに駆り立てられた私は、一番最初に目にしたものをまず写生することにした。いたく感動したからなのだろう、兵士たちは親切心を起こし、写生しやすいようにと、テーブル代わりに膝を私に提供してくれた。それだけではない。ギラギラと燃えるような陽射しから私を護ろうと体を差し出し日陰を作ってもくれた。これほど素晴らしい物を目にし、兵士たちの燃えるような心意気にも接して、私は感動に震え、その感動を絵に込めて読者に伝えたいと心の底から思った。兵士たちの感受性の高さにふれて、私は、彼らの仲間であることの幸せと、同じフランス人であることの名譽を嘯みしめたのだった⁽¹⁸⁾。

ドノンが強調したこと、それは、遺跡を眼前にしてフランス軍の全員がひとしく心を揺さぶられたその一様さである。遺跡に対する感動を共有しうる人びととして「フランス人」が指定されているのだ。

「同じフランス人であることの名譽を嘯みしめ」るドノンにとって、そのような「フランス人」の境界線の向こう側にいるのが、古代遺跡を放置しておくだけでなく破壊もするアラブ人とトルコ人だった。たとえば、アレクサンドリアの「ポンペイウスの柱」周辺の古代遺跡の円柱が、641年にアレクサンドリアを占領した正統カリフ時代のアラブ人によって流用されたことを、ドノンは批判する——「今でも残っている正統カリフ時代の壘壁は、プトレマイオス朝時代の建物の残骸を利用して造られたものだろう。その証拠に、正統カリフ時代の建築物には、破壊があったことを思わせる痕跡がいたるところに残っている。城壁の窓や入口の枠材として花崗岩の円柱がそのまま用いられている。用途にふさわしいように石柱を加工し直す労さえ疎まれたのだ⁽¹⁹⁾」。

イスラーム化した7世紀以降のエジプトにおいて、それ以前の建造物や遺跡が保護されなかったのは事実である。ムスリムたちにとって、イスラーム化以前の建造物は異教の産物であって、それがどれほど壮大なものであっても、それだけでは保護に値するものではなかった。エ

(18) *Ibid.*, p.172.

(19) *Ibid.*, p.61.

ジプトの政府とムスリム住民がイスラーム化以前の文化財の保護に熱心になるのは19世紀半ば以降のことで、欧米人を惹きつける観光資源としての経済的価値が生じたことがその背景にあった。さらに、「エジプト人」としてのナショナリズムを涵養するうえで、イスラーム化以前の古代エジプト文明に利用価値が生じたことも、古代遺跡保護の動きを助長したのだった。ようするに、遺跡を保護するかしないかは、経済的・社会的条件によって決まるのだ。ところがドノン、この条件を視座のなかに入れない。その結果としてドノンの議論は、遺跡保護志向の有無を、いわゆる民族性なるものに起因させる安易な本質論に墮してしまっただの。

古代遺跡に感動するかしないか、遺跡を保護するかしないかは、それを調査するかしないかという学問上の問題にもつながっていく。ドノンは、フランス人にこそ学問研究を領導する使命があり、古代エジプト史の解明だけでなく、アラブ人によって征服される7世紀以降のエジプト史の解明も、アラブ人ではなくフランス人によってなされると主張する。たとえば、第21番図版「カイロにナイル河の水を引く水道橋」に添えられた説明文がそうだ。14世紀に建造されたことが後年明らかになるが、遠征当時は正確な建造年代が特定できていなかった水道橋である。

これらの建造物は何世紀に造られたのか。それを解明するには、造らせた君主たちの支配年代を調べる必要がある。アラブ人に年代記を与える仕事は、おそらくフランス人の仕事となるだろう。手書き資料の発見によってアラブ史を時代区分したり、ヒエログリフの解読によって古代史の闇に光をあてたり、……（中略）ようするに、科学と技芸をその生地に再びもたらすことによって新しい時代を創る仕事が、フランス人の双肩にかかってくるだろう。

「科学と技芸をもたらず」という主張は、「文明化の使命」論と称せられてきたもので、近代帝国主義イデオロギーの根幹にほかならない。水道橋に関する説明文にかぎらず、ドノンはこの「文明化の使命」論を『エジプト紀行』のなかで何度も繰り返して高唱した。たとえば、上エジプトの豊饒さを指摘しながら、「小川の流れゆく丘陵さえあれば、エジプトは世界一の美しい国となり、住民がいきいきと働けるようにしてくれる政府さえあれば、エジプトは世界最良の国となるだろう」と語る。「政府」とは、もちろん、フランスによる統治が想定されているのだ。さらに、上エジプトで古代運河の遺構を発見した際には、地中海ないしナイル河と紅海を結ぶ運河の開削を「万人に利益をもたらず」ものだとして、この企てを図ったボナパルトを「エジプトに恩恵を施す者」と称したりするのである。卓越した科学と技芸、優れた政治と経済。ボナパルトを先頭にフランス人はそれら文明の果実をエジプトで育もうとしたのだ、⁽²⁰⁾というわけだ。

(20) *Ibid.*, pp.135, 140.

2 かすかな夾雑音

ボナパルトを主演とし、ドセーを準主演とする英雄譚。そして、自他の境界線をくっきりと描く逸話のかずかず。くわえて「文明化の使命」論。ドノンの『エジプト紀行』中には、これら三要素が力強く協和音を奏でている。ただし耳をすませば、和音を乱す夾雑音に気づく。自他の境界線が一瞬だがかき消える、そんな逸話も書きこまれているのだ。上エジプトにおけるフランス支配の一面を、ドノンは正確に観察していた。たとえば、こんな記述を残している——「(1799年1月21日の)夜半にある村に着いたのだが、その村がエル＝ベゼラという名前であることがわかるのは、翌朝のことだった。名前を教えてくれるはずの住民が、人っ子ひとりいなかったのである。だが、もぬけの殻の村の方が、わたしには好ましかった。身ぐるみはがされる住民の阿鼻叫喚を耳にせずにはすむのだから」。戦禍に喘ぐ住民の苦境を思いやる気持ちを、ドノンは失ってはいなかったのである。

そして、この戦禍を目にしてドノンは、「文明化の使命」を掲げてエジプトを占領するフランス軍の行動に懐疑心を募らしさえる。「たしかにわれわれはマムルークたちを追い払った。しかしそれは、彼らと交替しただけのことではなかっただろうか」と自問せざるをえなくなるのだ。なぜなら、「マムルークたちよりも公正だと自負していたわれわれが、実際には、毎日、不正な行為をしでかしている」からだった。「住民の幸福のために、という思いでエジプトまでやってきたのだが、その住民の行く末は、以前より良くなるどころではなかった。われわれが近づくと、住民は恐怖におのき逃げまどう。われわれがいなくなってから彼らはもどって来るが、そこには荒廃した家があるだけ」という状態に、ドノンは戸惑う。そして、「この地をマムルークたちが立派に治めていないにしても、そのことを批判する資格がわれわれにはないかもしれない。われわれもこの地を穢しているのだから。すくなくとも既得権という点では、もう何世紀にもわたってこの地を所有してきたのだから、彼らの方がわれわれよりは上である」とドノンは考えずにはおられなかった⁽²¹⁾。フランス人とマムルークを優劣の差違でもって区切る境界線が、フランス軍によって引きおこされる戦禍を目の当たりにして、かき消えたのである。

それだけではない。ムスリムを残忍、狂信、懶惰、吝嗇、強欲などときき下ろす一方で、ドノンは、それとは対極的な表現でムスリムを賞賛する場合もあった。たとえば、エジプト現地で雇ったアラブ人従者について、ドノンは彼の「友人として」の資質に賛辞を惜しまない。ドノンは従者の肖像スケッチを『エジプト紀行』にわざわざ掲載したうえで（第110番図版）、こんなふうな説明書きを記した——「姿形に気品があるだけでなく、優れた精神を備えた人物だった。召使いとして望まれる特性をすべて身につけているだけでなく、友人として望まれる特性もすべて備えていた人物だった」。

ドノンは、アラブ人を吝嗇だと批判する一方で、慈善精神の存在にも気づいていた。上エジ

(21) *Ibid.*, pp.72-73, 146-47, 219-20.

プトの中心都市の一つアシウスを出立してさらに南下することになったドノン、街中から砂漠までの道筋に無料の水飲み場が整備されていることに感激している。「約2キロメートルごとに、通行人と馬に水を飲ませてくれる貯水槽があった。アラブ人の思いやり深さをよく示しているこの小さな無私無欲の施設を、わたしは一枚デッサンしておくことにした⁽²²⁾」というのである。

1798年10月にカイロで勃発した反仏暴動に際しても、ドノンは、反徒たちの「復讐心」と「狂信性」を強調するだけではなかった。フランス人学者・芸術家たちが、彼らと知り合いのアラブ人の邸に匿われ難を逃れたことも、ドノンはしっかり書きとめている。ドノン自身が、そのようにして命を救われた一人だった。そしてドノンは、フランス人の命を救ったアラブ人の行為に対して、こんなふうな感慨を覚えたのだった。

下層民と、一部の有力者たちは、反乱に際し、狂信的で残忍だった。しかし中産階級は、どの国でもそうなのだが、理性と道徳心を持っており、習慣・宗教・言語の点でまったく異なるわれわれに対して、たいへんヒューマンで寛大⁽²³⁾だった。

フランス人对アラブ人という境界線は、資産の多寡という別の境界線によってかき消されたのである。

3 ポスト『エジプト紀行』のドノン

『エジプト紀行』には、従来のオリエンタリズム研究やポストコロニアル研究が強調してやまない自他の優劣意識や「文明化の使命」論の典型だけでなく、わずかだが、その典型とは矛盾する夾雑音が混ざり込んでいる。しかし『エジプト紀行』出版後のドノンは、夾雑音を大きくする方向へと身を処することはなかった。ルーヴル館長として、ナポレオン体制内で美術行政の重責を担うことになったドノンは、夾雑音ではなく、協和音を大きくする方向で全力を傾けるのである。ドノンのそのような姿勢は、彼がプロデュースした2枚の絵画によく表れている。

一つは、グロ（Antoine-Jean GROS）に制作が依頼されたもので、ピラミッドの会戦におけるボナパルト訓示が画題だった。1809年5月、元老院が置かれていたリュクサンブール宮内をナポレオン賛美の新作絵画8枚で飾ることになり、そのうちの1枚としてドノンがこの画題を選んだのだった。『エジプト紀行』のなかでドノンが喧伝した、ボナパルト英雄譚のハイライトシーンの一つである。「ボナパルト将軍は、最後の指示を与えると、ピラミッドを指差しながら言った。『行け、これらのモニュメントの高みから……』』というドノンの叙述を忠実になぞって、グロは絵を完成させた。

(22) *Ibid.*, p.150.

(23) *Ibid.*, pp.117-18.

『ピラミッドの会戦を前にしてフランス軍に訓示する皇帝陛下』と題されたこの絵は、勝者と敗者とのあいだの軍事力の差を鮮明に造形している。このことに詳言は不要だろう。敗者と勝者フランス将兵とが混じりあわず、左隅から45度の角度で右上がりにのびる直線によって自他の境界がキャンバス上に引かれていることも、容易に見てとれる。ただし、描かれている敗者が、実際の会戦での相手だったマムルークだけでなく、オリエント一般に拡張されていることは一言付言しておこう。『帝国新聞 *Journal de l'Empire*』（1810年11月23日付）の評論が、この絵の意図を見事に言いあてている——「前景右にトルコ人、アラブ人、アフリカ人の3名の兵士が致命傷を負っている姿が見える。風変わりさで目立つよう描かれているこの一団は、エジプト戦役で打ち負かされた民族を表すアレゴリーである」。



『ピラミッドの会戦を前にしてフランス軍に訓示する皇帝陛下』（1810年）ヴェルサイユ博物館蔵

もう一点は、ゲラン（Pierre-Narcisse GUÉRIN）作『カイロの反徒を赦す皇帝陛下』で、1798年10月の反仏暴動の、その後日譚を描いている。1806年3月3日付政令で制作が国によって依頼され、完成後は、ナポレオンの宮廷が置かれたチュイルリー宮に飾られた絵である。前景右手には瀕死の反徒が一人横たわり、その他の反徒は、左手の一段高い場所にいるボナパルトに赦しを請うている。中景右寄りでは、赦された反徒が今まさに両手の戒めを解かれようとしている。そして、ボナパルトと反徒のあいだの後景には、担架で運ばれるフランス人将校。フランスは自軍に犠牲者がでて、寛大な心根で反徒を赦す、というのだ。赦すフランスと、赦されるオリエント。画面上で左右明確に区切りされて描かれたこの二項対立もまた、優劣の関係にほかならない。

暴動の実際の後始末は、ゲランの絵とは異なっていた。降伏を願いでた者の一部は確かに赦免された。しかし、前述したように、暴動指導者の多くは銃殺されたのである。処刑によって恐怖心を植えつけ、赦免によって抵抗心を骨抜きにする。専政支配の常套手段だ。暴動の実際の後始末では、寛恕と厳罰が狡智にも使い分けられ、一方、絵画の世界では、後者が捨象され前者のみが強調されたのである。

ゲラン作『カイロの反徒を赦す皇帝陛下』には、もう一つ、巧妙なからくりが施されている。ドノンの『エジプト紀行』にもとづく仕掛けである。アラブ人は赦免に感謝せず復讐の機会を狙いつづけている、とドノンは旅行記に記した。「悲嘆にくれた顔つきをしていたが、その表情の裏には復讐心が隠されていた」というのだ。絵のなかの反徒数人の眼光は、まさしく、復讐心を秘めているかのようなのである。寛大なフランス人と、悔い改めないアラブ人。この絵にも、

このような境界線が巧みに引かれている。

初公開当時にこの絵に接した者も、境界線をはっきりと見てとっている。匿名で出版されたものだが、『1808年度ル・サロン展出品絵画の理論的批評』によるとこのものだ——「皇帝は反徒を赦された。縛めが解かれ、自由になった反徒のなか



『カイロの反徒を赦す皇帝陛下』(1808年)ヴェルサイユ博物館蔵には、喜びを爆発させ謝意を表している者たちがいる。しかし一方で、凶暴な表情を浮かべている者たちもいる。怨讐に満ちた目つきだ。血に飢えたトラのようだ。何をもってしてもその心⁽²⁴⁾を和らげることはできない」。

4 『エジプト紀行』の読まれ方

ナポレオン体制期に書かれたエジプト遠征関連本の多くは、その後、忘却の淵に沈み、いまでは図書館の書庫で埃をかぶっている。しかしドノンの『エジプト紀行』は、このような運命をたどらず、ナポレオン失脚後も版数を重ね、現在でも、パリなど都会の大型書店になら常置されている。旅行記分野ではフランス出版界指折りのロング・セラーであり、エジプト遠征物の書籍のなかで累積発行部数第一でありつづけているのだ。

200年以上の長きにわたって読みつがれてきた大きな理由は、二つある。ナポレオンを希代の軍事英雄だと考える人間がいまでも多くいること。まずこれが一つ。なかでも、ナポレオンの名言中の名言とされ、ナポレオンをオリエント征服の軍事英雄として粉飾する「ピラミッドの会戦」訓示、それが、ドノンの『エジプト紀行』を契機に人口に膾炙されることになった。たとえば、この200年間に出版されたナポレオン伝記物のなかで売り上げ第一位を誇り、今日でも版数を重ねているジャック・ド・ノルヴァン『ナポレオン伝』(初版1828年)は、オリエントとの対抗を強調しつつ、こんなふうになポレオンを描く。

マムルークの豪華な服装、輝く武具、美しい馬。これらが、フランス軍の簡素で飾りのない軍服や武器と好対照だった。ボナパルト将軍は、スパルタ人を率いてペルシアの豪華な

(24) *Examen critique et raisonné des tableaux des peintres vivants formant l'exposition de 1808*, Hocquart, 1808, p.29.

軍隊と戦うレオニダスだった。だが、テルモピュライは繰り返されなかった。ピラミッドはフランス人に微笑んだのだ。ボナパルト将軍は叫んだ、「これらのモニュメントの高みから 40 の世紀が……」⁽²⁵⁾。

ノルヴァンをはじめ、『エジプト紀行』の読者の多くは、エジプト遠征を、オリエントに対してフランスの軍事栄光を輝かせたものとして記憶してきたのである。

『エジプト紀行』が長年にわたって読みつがれてきた理由は、もう一つある。それは、この紀行文が古代エジプト文明をヨーロッパに紹介し「エジプト学」の誕生を画した、とみなされているからである。大量の古代遺跡の図版は、たしかに魅力的だ。図版だけではない。テキストもまた、遺跡を前にして感動するフランス人たちをいきいきと描き、エジプト遠征を、人類の知の進歩に貢献した事業として語ったことは、前述した通りだ。

こうして、遠征は学術の発展に貢献したという説明が、『エジプト紀行』に言及されながら、この 200 年間というものの幾たびも繰り返されることになる。たとえばエリアス・ルニョー『ナポレオン伝』(1846 年)によるとこうだ——「ボナパルトのまわりには、学術と文芸に秀でるフランスを代表して、モンジュ〔築城術に貢献した幾何学者〕やドノンらがいた。はるか遠くの、野蠻が支配していたあの対岸の地で、わが国のこの集団が調査に乗り出すことになった」⁽²⁶⁾。ルニョーから 100 年以上のちのジョルジュ・スピルマン『ナポレオンとイスラーム』(1969 年)も、寸分変わらない遠征観をこんなふうに語る。

フランスの文明化力、つまりフランスの文化は、エジプトにしっかりと根を張った。……(中略) この予想外の成果をもたらしたものは、わが国の勇気ある軍人だけではない。ボナパルトのもとに集まり、エジプト学院を構成した、あの学者・芸術家集団こそ特筆に値する。有名な『エジプト誌』〔ナポレオン体制期に国費で刊行された、遠征の科学調査報告書〕。そしてドノンの『エジプト紀行』。……(中略) これらの記念碑的な仕事こそが、シャンポリオンをはじめ、わが国の幾多の著名なエジプト学者を産み出し、フランス科学の栄光をもたらした⁽²⁷⁾のである。

また、ドノンが自他の境界線を強調するために創造した逸話も、この 200 年間、多くの読者の興味を惹きつけてきた。両眼をえぐり取られた女性についての逸話はその最たるもので、多くの本がそれに言及し、あまつさえ筆を足して境界線をますます太いものにしてきたのだ⁽²⁸⁾。 「マホメット教徒の嫉妬深さのなせる業だった」とか、「女性の死体には刺し傷が 20 ヲ所、

(25) Jacques de NORVINS, *Histoire de Napoléon*, t.1, Furne, 1836, p.326.

(26) Élias REGNAULT, *Histoire de Napoléon*, t.2, Perrotin/Pagnerre, 1846, p.67.

(27) Georges SPILLMANN, *Napoléon et l'Islam*, Perrin, 1969, p.144.

(28) Louis REYBAUD et al.(éd.), *Histoire scientifique et militaire de l'expédition française en Egypte*, t.3, Dénain, 1830, p.166.

子どもは石の上で踏み殺されていた。ムスリムの疑い深さのなせる業だ⁽²⁹⁾」とか、その例は枚挙にいとまがない。

おわりに

フランスとナポレオンの軍事栄光を描き、エジプト遠征を学術上の発見の旅として言祝ぎ、そして自他の優劣の差違を強調する『エジプト紀行』。長いあいだ、『エジプト紀行』は、このような書物として読まれてきた。このような書物だとみなされてきたからこそ、多くの人に歓迎され版数を重ねてきた、ともいえるだろう。ところが、1970年代を境にして、『エジプト紀行』には別の顔もある、と気づかれはじめる。フランスによる軍事支配は惨禍をエジプト人にもたらすものだったという当然の事実が、『エジプト紀行』のなかで発見され、さらに、反植民地主義者としてのドノンが強調されるようになった。『エジプト紀行』のなかの夾雑音が「発見」されるようになったのである。

新しい読み方の先駆は、美術史家ジャン・シャトレンの『ドノンとナポレオンのルーヴル』(初版1973年)である。それによれば、『エジプト紀行』には「ナポレオン派のプロパガンダが描く戦役の様子とは違う、過酷で厳しいありさまが、客観的な証言として提示されている。戦闘のただなかにあって勇気を失わず、同時に、敵・味方の区別なく、人間の苦しみには無関心でいられない、そんなドノン⁽³⁰⁾だったのだ」。

エジプト遠征を題材にしたマンガ『火の玉スルタン』(1995年)に登場するドノンは、1798年10月のカイロでの反仏暴動に対するフランス軍の弾圧を、批判的に見つめる人間としてさえ描かれる。暴動の指導者たちが処刑される場面。このときドノンが、弟子のバンジャマンに、「エジプトのうえに広げられていた『人道主義ヴェール』も、今日これでもって引き裂かれた⁽³¹⁾」と嘆くのである。

1999年秋のこと、ルーヴル博物館で「ドノン展」が開催され、これに館長ピエール・ローゼンバールが寄せたつぎのような挨拶も、こうした読み方の一例だろう。「ドノンの語りは、戦争の野蛮さと残忍さを白日の下にさらした。それは、彼自身の言葉によれば『醜悪な』戦争。今日の用語では『植民地』戦争と呼ばれるものである⁽³²⁾」というのだ。

前述したように、『エジプト紀行』のなかの実際のドノンは、フランスによる軍事支配への賛意と、軍事支配にともなう蛮行への嫌悪とのあいだをゆきつもどりつしていた。カイロでの反仏暴動の後始末に際しも、処罰が手ぬるかったとドノンは嘆いている。『火の玉スルタン』のなかの「ドノン」とは180度異なる姿である。もちろん、ドノン自身が変化したわけではな

(29) Édouard GOUIN, *L'Égypte au XIXe siècle: histoire militaire et politique*, Boizard, 1847, p.48.

(30) Jean CHATELAIN, *Dominique Vivant Denon et le Louvre de Napoléon*, Perrin, 1999, p.82.

(31) Liliane et Fred FUNCKEN, *Le sultan du feu*, Mémoire d'Europe, 1994, p.25.

(32) Pierre ROSENBERG, 《Les vies de Denon》, *Dominique Vivant Denon: l'oeil de Napoléon*, Réunion des musées nationaux, 1999, p.22.

い。『エジプト紀行』やドノンを見る眼差しが変化したのだ。

それでは、こうした変化がなぜ生じたのだろうか。それは、1970年代に入って、フランス社会が脱植民地化へと大きく舵を切ったからにはほかならない。1830年のアルジェ占領以降、フランスは海外植民地の獲得に邁進していく。なかでも重要だったのが、もっとも近い北アフリカの地だった。同じアラブ＝イスラーム世界であることから、エジプト遠征は、19世紀の植民地拡張時代に、フランス植民地帝国建設の前駆だったとしてもはやされることになる。エジプト軍事征服を賛美するノルヴァンの『ナポレオン伝』がもっとも読まれた時代でもある。だが、アルジェリア戦争（1954-62年）の敗北を経て、1970年代以降、植民地戦争一般がようやく批判的眼差しに曝されるようになってきたのだ。

けっして反植民地主義者ではなかったドノンとその紀行文を反植民地戦争の記念碑として見る、近年のこの心性。これを、「フランスにもこういう立派な人がいました」式のフランス免罪論にすぎない、と斬って捨てることもできるだろう。しかし、免罪の必要性を感じる、つまり罪悪感を覚えるということ自体が、植民地主義の跋扈していた19世紀と比べると、心性の大きな変化なのではないだろうか。心性を含む広義な意味での社会を、固定したものではなく変化するものととらえ、それに棹さしたり、場合によっては異議申し立てをすることが必要なのだ。

流行のオリエンタリズム論に乗っかり、森だけを見て木を見ず、18世紀から現代にいたるまでオクシデントがオリエントに注ぎつづけている眼差しの不当性を指摘することはたやすい。しかしそれだけでは、社会の現に存する変化に棹さすことにはならないのではないか。ドノンを「オリエンタリスト」と批判するだけでなく、エジプト滞在中のドノンが優劣の自他意識から一瞬でも免れえたのはなぜか、を問うことが重要なのではないだろうか。おそらくその答えは、エジプト社会との接触を通じる心性の変容ということにつきるだろう。そして、このような接触が継続されてこそ変容がいつそう確かなものになることも、エジプトから帰国して後のドノンの軌跡からうかがえる。グロとゲランの2枚の絵をプロデュースしたドノンには、「オリエンタリスト」の姿しかないのだから。

エジプト遠征は、エジプト社会と実際に接触する機会を、フランス人将兵や同行学者・芸術家たちに提供するものだった。たしかに、この接触を通じてアラブ＝イスラームへの偏見をただ昂進させ、自他の境界線をますます太くするだけの者たちもいただろう。しかしドノンの例に見られるように、アラブ人と直にまみえることでこの境界線が消え去る、そのような事態も生まれていたのである。エジプト経験のおかげでドノンがフランス対アラブ＝イスラームという境界線を自分の心の中にまったく引かなくなった、というわけではない。境界線はどこどこで一瞬消えた、という程度のものであろう。しかし、木を見て森を見ないのが誤りのように、森だけを見て木を見ないことも、やはり誤りだろう。植民地支配という不幸な形であっても、異文化との接触は、優劣の自他意識を揺るがしうる機会なのだ。植民地支配体制が政治的には崩壊した21世紀の現在なら、この機会は200年前よりもはるかに実り多いものとなるに違いない。ドノンは、ルーヴルの館長就任前は教師として、そして就任後は反面教師として、この機会の価値を教えてくれる人物である。